

我等は斯くの如き支配階級の強硬と闘ひつゝ、一方政治的全自由獲得の爲めに西巢鴨町議院を絶好の機会として、同志屋宮朝一君を立候補せしめて闘ひ、敗れたりとは云へ、我等が政治的自由獲得の爲めに、多大の功績を残し、自主的労働組合法獲得の爲めには社会民衆並に友誼組合と協力しよく闘つた。全組合員諸君の協力的努力は組合行政方面に於て着々と堅實を加へ、我等が戦線又名古屋に於て、廣島に於て、擴大し、東京鐵道、經理局製機の同志らを加へ、益々選信産業凡ゆる部門と地域的擴大の歩を進めつゝある。一部怯懦なる反動的分子は今や全く其の欺瞞性を大衆の前に曝露し、選信下級従事員兄弟の信頼を失つて、其の餘命を保たん爲めに徒らなる中傷譏刺に終始し辛くも其の御用組合的役割を果して居る。又一、二の觀念的極左分子が、モスコ直輸入の指令に盲従して、民主的組合不信用化の爲めに奮動して居るが、結局彼等の行動も反動御用分子と共に支配階級の術策に陥る階級的裏切行為に墮しつゝあるのであつて、我等が光輝ある指導精神の勝利を愈々強く確信するものである。

親愛なる全國の同志諸君!! 我等が多端なりし本年度の過程に於いて、多くの功績を残し、誤りなき進展をなし得た所以は、我等が光輝ある指導精神の下に、同志諸君の捷まざる全力的協力の賜であると信ずる。政府は又々明年年度豫算編成に當つて人件費其の他にも高率の節減をなさんとして居るかに傳へらる。此の秋に際し、一層の決意と努力を以て、更に我等が陣營の擴大強化と、全選信下級従事員の信頼を負ふて起つる意氣を以つて、我等が社会建設の爲めに勇往邁進せられん事を希ふものである。

昭和六年九月

日本労働總同盟
選友同志會
會長 赤松克麿

所屬支部一覽表 (昭和六年八月三十日現在)

支 部 名	電 話	創 立	支 部 長	21 幹 事 員	事 務 所
選友同志會本部	チト	大正十四年九月			東京市芝區三田四國町二ノ六
東 横 支 部	チトス	大正十四年十月	早川 龜	村松信太郎	東京市外巢鴨町四ノ一
牛 込 支 部	チトウ	大正十四年十一月	牧山 政弘	安川 富三	東京市牛込區矢來町一〇九
下 谷 支 部	チトシ	大正十四年十一月	垣内 正三	池谷 徳治	東京市牛込區内
神 田 支 部	チトカ	大正十五年三月	玉井 與助	山西 泰之	東京市下谷區入谷町三〇 垣内方
本 郷 支 部	チトホ	大正十五年四月	藤澤 清二	中川 萬治	東京市神田區松永町十八 玉井方
赤 坂 支 部	チトア	大正十五年五月	榎本 哲	石原 常三郎	東京市本郷區元町一丁目二十六
淀 橋 支 部	チトヨ	大正十五年十一月	三上 誠一	山口 松藏	東京市赤坂區新町五ノ六
麻 布 支 部	チトアサ	昭和二年一月	濱田 元治	柴田 小太郎	東京市外大久保町四六久保五〇四
中 野 支 部	チトナ	昭和二年二月	浦山 隆行	森田 嘉章	東京市麻布區新網町一ノ五七 鈴木方
品 川 支 部	チトシナ	昭和二年十一月	宮尾 眞一	眞杉 清光	東京市外中野町本町通り二ノ三八
寺 島 支 部	チトテ	昭和三年四月	森下 親司	吉澤 隆藏	東京市外品川町南品川淺間臺一五一七
世 田 谷 支 部	チトセ	昭和三年五月	大坪 長作	内藤 冬造	東京市外世田谷町新田七七 内藤倉造方
落 合 支 部	チトオ	昭和三年五月	柘原 携生	右兼 五十嵐 任進	東京市外落合町下落合五〇四 平山方